

琉球大学学術リポジトリ

L.ライトの診断的論証と非言語的要素

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学人文社会学部 公開日: 2021-04-22 キーワード (Ja): L. ライト, クリティカル・シンキング, 診断的論証, 理解, 能力, 非言語的要素 キーワード (En): 作成者: 吉満, 昭宏, 浜崎, 盛康, Yoshimitsu, Akihiro, Hamasaki, Moriyasu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48328

L. ライトの診断的論証と非言語的要素

吉満昭宏・浜崎盛康*
(* 琉球大学名誉教授)

L. Wright on Diagnostic Argument and the Inarticulate

Akihiro YOSHIMITSU and Moriyasu HAMASAKI*
(*Emeritus Professor, University of the Ryukyus)

本稿は、L. ライトの「診断的論証」を紹介し、そこでの非言語的要素について論じる。まずは論点を設定し、背景としての彼の哲学について触れる(第1節)。次に、彼独自の診断的論証について紹介し(第2節)、そこでの非言語的要素の扱いについて見ていく(第3節)。最後に、診断的論証の哲学的意義を考察し、今後の展望を提示して論文を締めくくる(第4節)¹。

キーワード：L. ライト、クリティカル・シンキング、診断的論証、理解、能力、非言語的要素

第1節 論点の設定と背景

1.1 論点の設定

米国の哲学者ラリー・ライト (Larry Wright, 1937~) は、一般には目的論や機能の分析で有名だが、他方でクリティカル・シンキング (以下「CT」と略す) や非形式論理学 (informal logic) の研究者としても知られている²。彼のCTでの枢要な道具立ては「**診断的論証** (diagnostic argument)」であり、これは

¹ 担当分担に関しては、第1・2節、3.1節、4.1節、4.2節後半は吉満が、3.2節、4.2節前半は浜崎が担当した。

² 以下では「クリティカル・シンキング」と「非形式論理学」を便宜上、同義のものとして扱う。

「暗黙の問い (implicit question)」「理解 (understanding)」「能力 (competence)」などの諸概念に支えられている。本稿は、彼の『実践的推論』(Wright [1989])を中心に「**診断的論証とは何か**」と「**診断的論証との関係における非言語的要素の扱い**」という二つの論点を主に扱う。前者は第2節で、後者は3.1節で、『実践的推論』の該当箇所を要約する形で、それぞれ明らかにされる。ただし、彼がこの著書で非言語的要素について主題的に論じている箇所がないので³、後年の彼の文献からこれらの概念の記述を見ていくことになる(3.2節)。そして、これらを踏まえた上で、診断的論証の哲学的意義と更なる可能性を探ることとする(第4節)。

1.2 論点の背景

ここでは論点の背景として、ライトのCT本の独自性と彼の哲学について簡潔に述べる。英語・日本語で出版されている哲学系CTの教科書は、ほぼ9割が同じような方針を採っており、もはや「規格化されている」と言っても過言ではない。つまり、「図1.1の要素(吉満・浜崎 [2019] 72頁の図2.1と同じ)を、体系的に一貫した枠組の下でなく寄せ集め的に、漏れなく盛り込む」というものである。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">a. 論証の明確化：議論の構造を明確にする作業b. 意味の検討：議論の際に使われる言葉や表現を明確にする作業c. 前提の検討：前提の正しさを検討する作業d. 推論の検討：推論の正しさを検討する作業 |
|---|

図1.1 CTの要素

このことを、版を重ね広く教科書として使われていると思われる Rudinow & Barry [2008] (第6版, 全13章)を取り上げて確認してみる。彼らの本は、

³ ライトの著作全般に関してこの事柄を、彼本人に電子メールを介して尋ねたところ、確かにその通りだが、Wright [2011], [2013]で、その論点について幾らか取り組んでいる、との趣旨の少々控えめとも思える返答(2020年7月29日付)を頂いた。このことは、本稿3.2節を中心に反映されている。

特に一貫した枠組を提示することもなく、まずは「クリティカル・シンキング」(第1章)の概念を扱い、次に「言語」(第2章)(図1.1の「b」に相当)と「論証とその構造」(第3~5章)(図1.1の「a」に相当)を扱い、更には「演繹的推論」(第6・7章)、「帰納的推論」(第8・9章)(共に図1.1の「d」に相当)、「前提の吟味」(第10章)(図1.1の「c」に相当)、「誤謬論」(第11・12章)(図1.1の「c」「d」に相当)の順で扱い、最後に応用編としての「論証文の書き方」(第13章)へと進んでいくという具合である⁴。

ライトはこれまでに三冊の哲学系CTの教科書を出版している(Wright [1982], [1989], [2012])が、本稿では主に『実践的推論』(1989年)を取り上げる⁵。この本は全8章立てで、最初の6章(約290頁)はもっぱら彼独自の診断的論証に充てられている。詳述すると、第1章「論証:支持を与える」では、まず、いわゆる「寛容の原理 (principle of charity)」を説明して、これを用いて、書かれたテキストを論証へと仕立て上げることを目指している。第2章では、「演繹」と「帰納」の区別と説明がなされ、「対抗結論」と「暗黙の問い」といった今後鍵となる概念を提示し、次章への布石としている。第3章では、これらの概念に基づき、「診断的帰納」と呼ばれる論証を全面

⁴ このようなCT本に関しては枚挙に暇がないのだが、逆に残り1割の例外的なものの代表例としては、「プラグマ弁証論」という立場で知られるVan Eemeren & Snoeck Henkemans [2017]が挙げられる。

⁵ 「各書の特徴」と「もっぱら『実践的推論』を扱う理由」について述べておく。『より良い推論』(1982年)の方は全8章立てで、最初の5章(約170頁)は診断的帰納論証に充てられ、残りの3章(約100頁)は言語についての哲学的考察に充てられている。そして、診断的帰納論証の記述に関してはまだ発展途上の段階にある。『クリティカル・シンキング』(2012年)の方は全8章立てで、その全てが診断的論証に充てられており、図や実例や練習問題を多用して、完全にCTの教科書として割り切っていると同時に、診断的論証の完成を見ている(約400頁)。これに対してここで扱う『実践的推論』は、診断的論証の記述が一応の完成の域に達しており、CTの学習により主眼を置いた後年の『クリティカル・シンキング』よりも哲学的考察に溢れているという点が特徴的である。つまり、もっぱら『実践的推論』を扱う理由は、診断的論証の一応の完成を見ており、更にはその哲学的記述(特に本稿との関連で言う「非言語的要素」)に溢れているというものである。ただし、本稿での記述は『クリティカル・シンキング』での記述も一部参考している。なお、「診断的帰納 (diagnostic inductive) 論証」と「診断的帰納 (diagnostic induction)」と「診断的論証」は同じものであるので、留意されたい(前二者は『より良い推論』と『実践的推論』で、後者は『クリティカル・シンキング』で多用されている)。

的に論じている（本稿第2節と3.1節を参考）。第4章では診断的帰納の応用（因果関係、証言、統計的推論）が論じられ、第5章では二次的診断としての「**予測 (prediction)**」と「**推奨 (recommendation)**」が扱われ、第6章ではいわゆる「**誤謬論**」が扱われている。そして残りの2章（約75頁）は言語についての哲学的考察に充てられている。このように、図1.1の(a)~(d)が、**診断的論証という彼独自の道具立てと哲学的姿勢でもって一貫して扱われている**という点において、他の一般的な哲学系CTの教科書とは一線を画しているのである。更に、後半の言語に関する哲学的考察（Wright [2012] では削られたものの）も、類書ではあまり見られない特徴である。

本節の最後に、ライトの哲学的背景について述べる。彼は最初の著書『**目的論的説明**』（Wright [1976]）で、目的論の概念を見直しそれに基づく機能の分析を与えたことで有名である。自身の哲学的変遷に触れている「13年論文」によると（pp.233f）、彼はこの本の出版後、自身の目的論に対する他の哲学者からの批判を受けて、この問題を論じる際には、「なぜ？」の問答を取り巻く「**文脈 (context)**」の考察が重要であることに気づかされた。[ここからは筆者の推測だが、] こうして次第に、文脈に埋め込まれた行為者間の問答をベースにした実践的推論へと関心が移っていったものと思われる。そして彼のウェブサイトによると、初期の目的論の研究と後期の実践的推論の研究とを「**理性・理由 (reason)**」の点から統一的に論じる著作を目下、計画中とのことである（Wright [2020]）。また彼は、日常言語学派として知られる英国のギルバート・ライル（Gilbert Ryle, 1900~1976）の強い影響下にある。ライルと言えば、主著『**心の概念**』（Ryle [1949]）においてデカルト以来の心身二元論を乗り越えるために、「**傾向性 (disposition)**」の概念に基づく、心に関する新しい見方を提起し、現代の「心の哲学」の火付け役となったことで有名である。またライルの学者としてのスタートは、R. インガルデンやM. ハイデガーの書評であることから分かるように、「**現象学 (phenomenology)**」の影響も大きい。更に、ライルは『**ジレンマ**』（Ryle [1954]）

を通じて、非形式論理学の擁護者としても知られている。このようなライルの哲学が、ライトの CT 本に、表向きは全く名前が出てこないものの影響を与えていることは、以下で（特に 3.1 節）確認される⁶。

第 2 節 診断的論証の概要

2.1 前提となる諸概念

2.2 節から 3.1 節までは『実践的推論』の第 3 章「証拠 (1) 診断的帰納」に基づき、診断的論証の概要を与える。その前にまず四つの概念について見ていく⁷。

- **暗黙の問い** (implicit question) (「IQ」と略されている) … 論証の動機付けは、答えを求める問いの内に把握されるだろう。これを論証の「暗黙の問い」と呼ぶことにする。と言うのも、これは常に述べられているわけではなく、取り囲む文脈において暗黙にされているに過ぎないからである。
- **対抗結論** (rival conclusion (the rivals)) … 論証の対抗結論とは、われわれが考察したい暗黙の問い (IQ) への全て異なる (相互排他的な) 答えである (なお、文脈によっては「対抗説明 (rival explanation)」や「対抗筋書 (rival story)」とも呼ばれる)。
- **理解** (understanding) … 理解とは、われわれ人間が生まれてこの方、現実世界と接する中で修得してきた「様々な物事間の繋がり (connection between different things)」(Wright [2001] p.102) や、「世界がどう動いているかについてのわれわれの偶発的・経験的把握 (our contingent grasp of how the world works)」(Wright [1999] p.205) のことである (3.2 節に

⁶ 今回取り上げたライトの諸文献では、唯一 13 年論文にてライルの『心の概念』が参考文献として挙げられている。ライトがライルからいかに強い影響を受けているかについては、電子メールでの返答 (2020 年 7 月 29 日付) でライト自身が認めている。

⁷ 最初の二つは、『クリティカル・シンキング』での「用語集」(pp. 405ff) からほぼ採ってきた。後の二つは、論者 (吉満) による (吉満・浜崎 [2020] 42 頁も参照)。

て詳述)。

- **能力 (competence)** … 能力とは、このような理解に基づいて、われわれの周りの状況に対処する何らかの認知的・行為的活動のことである。CTではこれらの諸能力をフル活用して、理由から結論を導き出す判断力を発揮することになる (3.2 節にて詳述)。

2.2 基本的発想—帰納的論証の二つの特徴⁸

非演繹的論証という広い意味での帰納的論証の中には、「物事についてのわれわれの理解 (our understanding of things)」(p.93) を利用する論証がある。これが「診断的論証」であり、その体系的扱いを本 2.2 節から 3.1 節にかけて詳述する。

帰納的論証の評価には「尤もらしさについての判断 (judgments about plausibility)」⁹ (p.93) を行うことが要請される。帰納的繋がり**の強さは、「筋書 (story)」**(p.93) の尤もらしさにかかっており、筋書の尤もらしさの判断は日常よく行われているものでもある。日常的状況の広範囲に亘って、様々な可能性がどれくらい尤もらしいかを述べることに、われわれはとても堪能 (competent) である。その際、これまでの経験からして、突飛な説明 (例：消えた腕時計を説明する際の「宇宙人によりテレポートされた」という説明) は尤もらしくないとされる。このような判断技能を活用する論証形式が、まさにここで求められるものである。そして尤もらしさの評価という観点から、帰納的論証は次の二つの本質的な特徴を持っている (p.94)。

1. **程度問題** (演繹くらいに強い、まあまあ、とても弱い、あるいは何であれ間に来るもの) という特徴。なお、繋がり弱いこと (程度が弱いこと)

⁸ 以下での参照箇所は、特に明示しない限り、『実践的推論』(Wright [1989]) からのものなので、そこでの頁数だけを挙げる。

⁹ 後で見るように、これには相対的と絶対的の二種類がある。

は価値がないというわけではない。

2. 尤もらしさの評価は常に、適切な観点において世界がどう動くかについての膨大で、言語的に明瞭化されていない理解に拠っている、という特徴。帰納的論証は、演繹的論証とは全く違って、支持のために世界にもたれかかっている (lean on)。全てのものが、われわれの日常経験の馴染み深い対象について単純な事実¹⁰に拠っている。

最初の「程度問題」については、95~96頁で詳述されているので、われわれもまず、これを見ていく。帰納的論証を評価する際に大半を占める技能は、二つの対抗筋書の内、より尤もらしいのはどちらかを述べる能力である。通常これは、筋書が「どれくらい (how)」(p.95) 尤もらしいかを評価するよりも簡単である。このような相対的な尤もらしさ判断を適用し発展させるのに伴われる容易さは、帰納的論証を作り証拠を評価する際のとても大きな容易さへと通じることになる。この技能は特別なものではないので、われわれがこの技能を持ちこれを広く活用しているのは、驚くべきことではない。

相対的な (relative) 尤もらしさ判断は、絶対的な (absolute)¹⁰ 尤もらしさ判断よりも容易に下せるだけでなく、常により洗練されたものでもある。一方で絶対的な尤もらしさを扱う場合、これは典型的には粗雑なものとなる。例えば、その評価のために用いる評定尺度は典型的には四つないし五つである。五つの場合、「确实」>「とても尤もらしい」>「五分五分」>「とても尤もらしくない」>「确实に偽」の5段階である。他方で、相対的な尤もらしさ判断を使うことで、対抗筋書の間に、より多くの区別を持った「ラン

¹⁰ ここでの「絶対的な」は、「絶対确实な」という意味でなく(それだと形容矛盾になる)、「他と比較することなく或る対抗筋書をそれ自体として、評価尺度のどれかに位置づける」という意味であり、ここでの「相対的な」は「単に二つの対抗筋書を比べる」という意味なので、留意されたい。

キング (ranking)」(p.95) を生み出せる。

こうして、ライトが述べているように、われわれの基本的な評価手続きは、「比較可能 (comparative)」(p.95) なものとなる。これは強さの度合をそのままなすものではないが、対抗筋書間のランキングのようなものである。われわれはしばしば、答えがどれくらい良いかについて不確実なままでいながらも、IQ への「最良」の答えを見つけ出せるのである。

このことは欠陥ではなく、人間の技能が世界に対処する仕方の結果である。われわれは、情報が限られていることに気づきながらも、しばしば決断して「不確実な選択肢の中から最良のもの (the best among uncertain alternatives)」(p.96) を賢く探さなければならない。人生における大半の決断は、適切なデータについての断片的で印象に基づく把握でもってなされる。その場合、われわれがやれる最良のことは、絶対的な尤もらしさ判断ではなく、相対的な尤もらしさ判断なのである。

たとえ絶対的な尤もらしさ判断を確固たるものにしたとしても、そこに至るまでに従事している「探求 (investigation)」¹¹ は、相対的な尤もらしさ判断に基づいている (p.96)。われわれは不確実な最良の「見通し (bet)」(p.96) から始めて、それに関する情報をより多く集めることで、可能性のリストを洗練させていく。常にあまりに多くの可能性があるので、それを減らしてくれる指針を必要とする。この指針は、われわれの相対的ランキングによって提供される。このことは実際、科学における実験的手続きの原理である (つまり、最も尤もらしい選択肢を最初にテストするように実験を設計する)。このようにして、競争のための困難を次第に取り除き、より尤もらしくないものを次第に避けていくことで、「相対的な尤もらしさ判断」から「絶対的

¹¹ ライトは“investigation”という語を一貫して用いているが、これがパース的な意味での“inquiry”(吉満・浜崎 [2020] 第2節を参照)と軌を一にするのは明らかであり、この点は本稿4.1節で論じる。なお、吉満・浜崎 [2020]では“inquiry”に対して、学術的な意味合いが強い場合には「探究」を、一般的な意味合いが強い場合には「探求」を充てているが、“investigation”に関してはこの区別をせずに「探求」で通すことにする。

な尤もらしさ判断」を作り出せるのである (p.96)。

今やこの「程度問題」についてより良い把握を持つことができるだろう。この一部は、「帰納的論証は、たとえ繋がり**の強さが大きくなくとも、どれくらい価値がありうるか**」という改善された理解である。つまり、弱い帰納的論証でさえ、情報が限られている場合には「**合理的な指針 (rational guidance)**」(p.96)を提供するのである。粗いデータに基づいて行動しなければならない場合、帰納的論証は最良の見通しを与えてくれる。もっとデータが得られるなら、帰納的論証はそのプロセスに指針を与える。典型的にはわれわれは限られた情報だけから探求を始める。最良に見える諸対抗筋書を簡便に決定し、こうして、次にどうすべきか、どんなデータを集めるべきかを知るのだろう。このことは、たとえ、まともな対抗筋書の全体の集まりがとてもよい見通しをなさない場合ですら正しい。われわれはしばしば「**手掛かり (clues)**」と「**勘 (hunches)**」から出発する (p.96)。だがこれらは、手続きに方向性を与えるのに、また無限の可能性から「**理に適った・道理的な (reasonable)**」¹² (p.96) 始まりを区別するのに十分である。こうして、相対的な判断こそが、われわれが開始するために必要なものなのである。

次に帰納的論証の二つ目の特徴について、97~98 頁で以下のように詳述されている。強い帰納的繋がりについて考えてみると、その強さがどれくらい論証以外の事柄の多くに、また当然と見なしている物事に依存しているのかが分かるだろう。このように、世界についての事実の無数に大きな集まりは、全ての帰納的論証の強さに「**よりかかっている (bear on)**」(p.97) ののである。

われわれは、当の論証の強さに明確に関連している物事でもって、どのように上手く始めているのか？ なぜ、われわれは全てを含めないのか？ われわれどうやって、「明確な支持」を「当然と見なしていること」から区別しているのか？ これらは基本的で、共通した、理解可能な疑問なのだが、わ

¹² 道理的 (reasonable) や道理性 (reasonableness) の概念については、吉満・浜崎 [2019] 第3節を参考にせよ。

れわれの推論の実践的な特徴を見ることで容易に取り除けるものでもある。

まずわれわれは、関連する全てのものを、無数にあるために、数え入れることは明らかにできない。だが幸いにも、全てを書き出す必要はない。われわれは世界がどう動くかについて実際に正しく多くのことを理解している。「草は緑である。」「この家の全ての部屋には空気がある。」等、ほとんど言及することもなく、論証においてほとんど書き出すこともないこのような事柄がごまんとある。このような世界の明白で安定した不変性は、帰納的論証では当然視されている事柄である。ここでの規則は「**支持の中から重要で有用な物事だけを述べよ一つまらない部分は省略せよ。**(Mention only important, useful things in the support—omit the boring parts.)」となる (p.97)。

何が言及するのに有用かは、文脈ごとによって変わる。よって、論者が注意して当然と思える全てのものを支持に含め、聞き手が論証の或る部分について知らないようなら、それを加えることが求められる。

以上のことより、われわれの帰納的論証の評価が、世界がどのように動いているかについてのわれわれの理解の範囲にどれほど深く掘っているのかが、容易に見て取れる。このことはもちろん、各人がよく経験している或る話題についての論証を、そうでない他の話題についての論証よりも、より良く評価できることを意味している。だが、われわれは既に多くの経験をしており、必要とあらば、もっと多くの経験を見出す術を知っている。**物事がわれわれの環境でどう動くかについての一般的な理解は、われわれが皆、全くもって自然な形で到達している何物かなのである** (p.98)。なぜなら、これはわれわれの生存と密接に結び付いているからである。われわれの理解する能力は、自身のより良い技能の内の一つなのである。そしてこれは、帰納的論証がわれわれの推論においてこのような莫大な役目を果たしている所以なのである。

更にライトは、診断的論証における「技能 (skill)」(p.98) について、以下のように論じる。「物事がどう動くか (the way things work)」についての

われわれの理解は、日常的な対象や日常生活での出来事と関わる場合には最も確実なものである。われわれは、「物事についての自身の直接的な観察 (our direct observation of things)」(p.98) と「これら直接的な観察の背後で物事がどう動くかについての自身のより一般的な理解 (our more general understanding of how things work behind those direct observations)」(p.98) の双方を通じて、自身の周囲で何が起こるのかについて、とても良く把握している。われわれは、人生の流れの中で自身の前を通り過ぎていく物事 (例：五感で感じる物事の色や形) を「認識する (recognize)」(p.98) のに長けている。この技能を使うことになる論証に注意を払うなら、入手可能な最も強力な帰納的論証をそこに見出すのをいち早く知ることになる。

こういった論証を「**診断的論証** (diagnostic arguments、以下「DA」と略す)」(p.99)¹³ と呼ぶが、それはここでのわれわれの技能が診断 (何が起きているのかを語ること) の形を取るからである。その際、中心となる技能 (central skill) (p.99) は、「見る」「聞く」といった単純な知覚であり、ここでは、われわれは何が起こっているかに或る意味、直接遭遇し、それを「**読み取る** (read off)」(p.99) のである。この技能は、家や人物などを単に認識しているに過ぎないが、われわれはしばしば現場にいなくとも何が起きたかを語るのにも長けている (例：水たまりを見て、雨が降ったことを語れる)。この技能の場合、知覚的というよりも、むしろ一般に診断的である。こうして、直接的な知覚を含むが、それだけには留まらない、より一般的な技能 (general skill) (p.99) が、DA を確立することになる。

2.3 診断的論証の図式化

ライトは、DA と IQ、及び対抗説明のリストの作成と IQ に対する最良の対抗説明について、以下のように論じる。論証を DA と同一視する有益でラ

¹³ ただし、原文では “diagnostic inductive arguments” (診断的帰納論証) だが、注5の方針に従い、「診断的論証」の名称で通すことにする。

フで迅速な仕方は、その IQ に注目することである。最も一般的な診断的問いは「何が起きているのか? (What's going on?)」「何が起きたのか? (What happened?)」「あれは何だったのか? (What was that?)」であり、より特定の派生した問いは「何がそれを引き起こしたのか? (What caused that?)」「誰がそれをやったのか? (Who did it?)」「なぜそれは起こったのか? (Why did this happened?)」といったものである。こういった IQ を持つ帰納的論証こそ、ここで追及する典型的な DA である¹⁴。逆に、どんな IQ が診断的でないかと言うと、「C は真か?」という「成否」の二つの答えだけを持ち大半において役に立たないものに加えて、次の二種類の IQ がそうである。つまり、「何が起こるのか? (What will happens?)」は「予測」を要求し、「われわれ (または私) は何をすべきか? (What should we (or I) do)」は「推奨」を要求する (pp.99f)。これらのいずれもが、論証の一部として診断を含むかもしれないが、双方とも明確な診断という認識を越えたものを要求する。これらについては、より容易な DA を修得するまでは後回しにしておく (こうして、これらの扱いは、『実践的推論』第5章で「二次的診断 (secondary diagnostics)」という名称の下で扱われることになる)。

以上のように、典型的な IQ が「そこでどうなっているのか?」「何が起きているのか?」なら、その答えは、「何が起きたのか?」についての筋書を語らなければならない。よって DA にとって、対抗結論は全て、或る種の「説明 (explanations)」(p.100) となる。このことは特に重要である。と言うのも、説明はわれわれの理解の自然な表現であり、これこそまさに、ここで活かしたい認識技能だからである (p.100)。DA は、様々な可能性についてのわれわれの理解を、対抗説明のリストの中に記録するのである。

以上を踏まえて以下では、帰納的論証の尤もらしさの評価に関する道具立

¹⁴ 「診断的」という名称からも分かるように、「生じている (生じた) 事実」や「生じしめている (生じしめた) 原因」について明らかにするのが、典型的な DA である。二次的診断の記述も含めて、この点は 4.2 節でも触れる。

てを作ることになる。それは、「相対的な尤もらしさ判断」をする際の技能を、当論証の IQ により生成される対抗結論のリストに適用するだけでよい。これにより、対抗説明のリストを尤もらしさの順でランキングすることができる（これをライトは「**尤もらしさランキング** (plausibility ranking、以下「PR」と略す)」（p.101）と呼んでいる）。

最初の図は、論証とランキングされていない対抗説明のリストでもって始まる（S は「理由・前提」を、C は「結論」を、「---d」¹⁵ は「診断が下されたこと」を、「?」は「結論が未定であること」をそれぞれ表す）（p.101）。

S ₁	C ₁
S ₂	C ₂
S ₃	C ₃
-----d	C ₄
?	C ₅
	C ₆

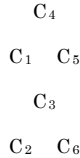
図 2.1 DA の発端

相対的な尤もらしさ判断はこのリストに順序を提供する。その際、われわれの理解に訴えて、尤もらしさの順にランキングしていただくだけである。理解が健全である限り、このランキングはわれわれの最良な知覚と同じくらい客観的なものである。例えば、次のようになる（p.101）。

C₄
C₁
C₅
C₃
C₂
C₆

¹⁵ ただし、ライトの表記は一貫して二重線（「=d」）だが、ワープロ表記の都合により、破線表記で通すことにする。

ただし次のように、「引き分け (tie)」も許す。この場合、「われわれの現在の理解では、 C_1 と C_5 は等しく尤もらしくて、確信をもって区別することができない (C_2 と C_6 の場合も同じく。)」と言えらる (p.101)。



PR のトップに明確に一つの対抗説明がある論証の場合、こういった事例での支持する言明は、IQ に対する最良の答えとして、或る特定の結論を実際に推奨するのである。これが、トップの対抗結論が当の結論と見なされる場合に、われわれが論証の図式化に読み込む仕方である。論証がこの条件を満たし、その結論が対抗結論の中で最良である場合、ライトはこの論証を「健全 (sound)」と呼んでいる。

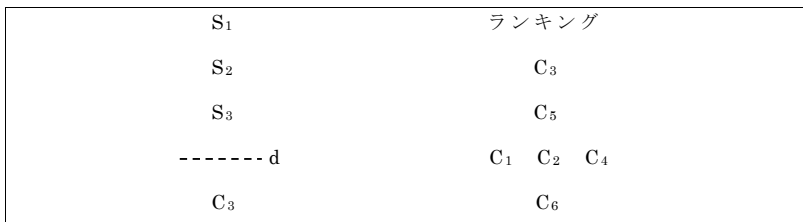


図 2.2 健全な DA (p.103)¹⁶

以上のような DA は、しばしば「最良の説明への推論 (inference to the best explanation)」と呼ばれる (p.103)。われわれが物事の動きを理解しているとき、われわれは「診断に関して有能 (diagnostically competent)」(p.103) であり、この「能力 (competence)」(p.103) の一部は、物事を説明する「力量 (ability)」(p.103)、様々な説明について相対的な尤もらしさを判断する力量である。われわれの判断のこの使用は、PR を与え、時には「最良の説明 (best

¹⁶ ただし、原文では“Sound Inductive Argument”(健全な帰納的論証)だが、注5の方針に従い、「健全な DA (診断的論証)」の名称で通すことにする。

explanation)」(p.103)を与える。

だが診断的技能には、われわれの推論においてもっと大きな役目を果たす別の要素がある。われわれは自身の尤もらしき評価を変えよう（または、強めよう）とするにはどうすればいいのかを、しばしば知っている。われわれは、どういった新情報がPRに影響を与えるかを知っている。こういった診断的技能の構成要素を、ライトは「**関連性判断 (relevance judgment)**」と呼んでいる (p.104)。何に対する関連性判断かと言えば、「IQ [に答えるの]に関連した」(p.104)判断であり、より正確には「PRに関連した・PRと関連性を持つ」(p.104)判断である。新情報が、従来のランキングを変えたり、引き分けを崩したり、ランキング間のギャップを広げるなら、関連的である。こういったものは、個別事例についてのわれわれの理解を変えることだろう。

われわれはまた、明確に何が関連的でないのかもよく把握をしている（例：大抵の山脈が南北に走っていることは、ランキングに何の影響を及ぼさない）。どんな事柄も、奇妙な状況においては関連的になるかもしれない。こういったものは、通常の期待を遥かに越えたものと見なされ、特異な状況が起きるまでは、その特異な示唆は無視しても構わない。

関連性を判断するわれわれの力量は、論証を「探求」へと変える。われわれの診断的技能の最初の構成要素は、「**追及を導く糸 (leads to chase down)**」(p.104)を与える。この要素は追及へと向かう。元々の文脈は問題を設定し、最初のPRを与える（その際、追及を導く糸がトップに来る）。新情報は、異なる「**尤もらしさ見積り (plausibility estimates)**」(p.104)でもって、一連の論証を生成する。こういったことにより、ランキングが変化したり、新しい対抗結論が現れたり、古い対抗結論が真剣な考察から排除されたりすることになる。

2.4 探求（診断的論証）のダイナミズムの具体例

以上の説明を踏まえて、「ジョーの海難事故」という冷戦時の架空の例で、

探求のダイナミズムを見てみよう (pp.102~106)¹⁷。ジョー・スミスは手漕ぎボートで大西洋を渡ってヨーロッパ大陸に行こうとして、ニューイングランドの海岸を出発した。その一週間後、彼の予定されていたコースを強力な嵐が通過した。数日後、彼のボートは発見されたが、無傷で空っぽの状態であ先の嵐の通過地点から数マイルほど離れたところで見つかった。この場合のIQは「ジョーに何が起きたのか？」であり、対抗結論は、彼に起きたであろう様々な事柄となる。このDAは次のようになる(図2.1を参照)。

S₁ ジョー・スミスは手漕ぎボートでヨーロッパ大陸を目指して、ニューイングランドから出発した。

S₂ 一週間後、嵐が彼のコースを横切った。

S₃ その数日後、彼のボートは、嵐が横切った地点の近くで空っぽの状態で見つかった。

-----d
?

対抗結論のリスト：

C₁ ジョーはボートから転落し、岸まで泳いだ。

C₂ ジョーは海の上を歩いてどこかへ辿り着いている。

C₃ ジョーは嵐により溺れた。

C₄ ジョーはスパイ任務のためにソ連の潜水艦と待ち合わせをした。

C₅ ジョーは通りかかった船によって救助された。

C₆ ジョーはUFOに乗った宇宙人に助けられ、今は火星に住んでいる。

¹⁷ ただし都合により、少しだけ表現や表記を変えている。また該当箇所では、その他に「大括り (lumping)」、「分割 (splitting)」、「合成 (compounding)」といった操作にも触れているのだが、「診断的論証の要点をとりあえず知る」という本稿の目的故に省略する。なお、『クリティカル・シンキング』では「可能性のバルーン (balloon of possibilities)」(Wright [2012] p. 153) という図が登場し、上記の諸操作も含めて、更に理解し易いものとなっている。

これまで知っていることを基にした PR は、次のようになる（ステージ I）。

C₃
C₅
C₄
C₁ C₂
C₆

よって、とりあえずこの段階では、次のものが健全な DA となる。

S ₁	ランキング
S ₂	C ₃
S ₃	C ₅
----- d	C ₄
C ₃	C ₁ C ₂
	C ₆

図 2.3 ステージ I（追及を導く糸）

この探求の過程で「沿岸警備艇が、ジョーのボートが数日後に発見されることになる付近で、水浸しになったボートから意識不明の男を引き上げたと報告した。」という新情報（S₄）を得たとする。するとこの段階では、ランキングが変動し、次のように C₅ がトップに躍り出る（ステージ II）。

S ₁	ランキング
S ₂	C ₅
S ₃	C ₃
S ₄ （新情報）	C ₄
----- d	C ₁ C ₂
C ₅	C ₆

図 2.4 ステージ II

更に「ジョーの妻が、戻ってきた警備艇に駆け寄り、救出された人物をジョー

と同定した」(S₅)なら、次のように C₅ 以外は全て真剣な考察の対象でなくなる (ステージIII)。

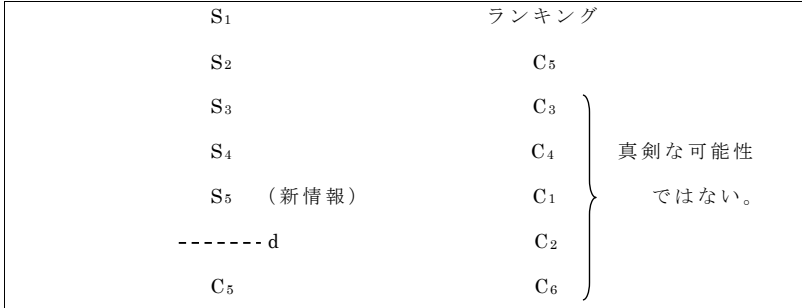


図 2.5 ステージIII

最後に「救出された人物が意識を取り戻し、ジョーの知人らに、自らのことをまさにジョーに固有の視点から説得的に語った」(S₆)なら、この結論は関連するデータでもって他を圧倒することになり、ここで探求は終了する(ステージIV)。

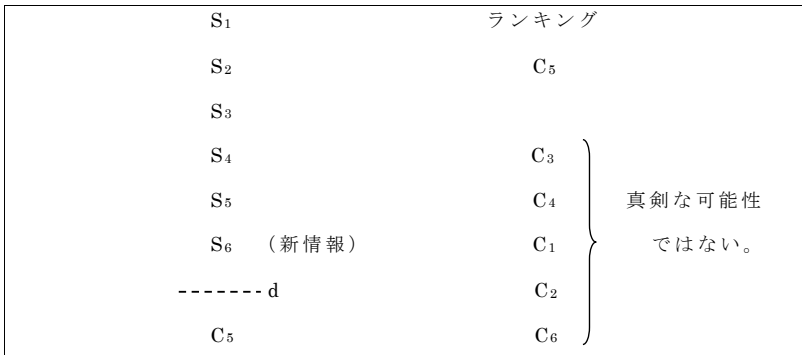


図 2.6 ステージIV

以上の過程が、「相対的な尤もらしさ判断」を「絶対的なもの」へと、「弱い帰納的論証」を「強いもの」へと変える仕方である。だがこれはまた、次のような DA の本性に関する重要な洞察でもある。DA は常に、少なくとも潜在的には、探求 (investigation) と発見 (discovery) のダイナミックな過

程の一部である。DA は、探求がその進捗を評価するために一時的に立ち止まるときに得られるものである (pp.105f) ¹⁸。しかしわれわれにとって、DA は探求を「始める (*start*)」(p.106) こともするのを知るのが、より重要である。証拠が不明瞭か疑わしい場合、やるべきことは「もっと進める (*go get more*)」(p.106) ことである。何が得られるかを知ることが、われわれの診断的技術の一部である。

2.5 痕跡データと非痕跡データ

次にライトは、「痕跡データ」と「非痕跡データ」について以下のように述べる。「診断的対抗結論は対抗説明である」ことを思い出すなら、われわれの診断的判断を役に立つ仕方では言語的に明瞭化 (*articulate*) (p.107) できるだろう。対抗結論を多かれ少なかれ尤もらしいと判断するとき、自身知っているものを基にして、何が起きたのか、何が起きているのかを対抗結論はどれくらい良く、または拙く説明するのかを、評価しているのである。われわれの能力 (*competence*) の諸分野において、物事の動きについてのわれわれの理解 (*understanding*) は、説明力を評価するための技能 (*skill*) として背景に現れる。われわれは、自身の理解を背景にして、様々な対抗結論が何が起きたのかを説明することが、どんなに容易か (または困難か) を判断するのである (p.107)。

われわれは、別の対抗結論を、その主題について知っている他の全てのことに「辻褄を合わせ (*fit*)」(p.107) ようとする。これが、診断的対抗結論がとても容易に「筋書 (*story*)」(p.107) へとなる所以である。例えば、先の実験の場合、最初のデータでは、「スパイ活動」という筋書は、われわれが知っている事柄とは、「溺れた」か「助けられた」という筋書の場合

¹⁸ この記述から分かるように、DA は「探求と発見の過程全体」という広義のもの (プロセス) と、「探求が (とりあえず) 結果したところの論証」という狭義のもの (プロダクト) とを含んでおり、多義的なので留意されたい (本稿 4.1 節も参考)。

ほどには、辻褄が合わない。

関連性判断がまさに辻褄合わせと同じ技能を利用することになる。先の海難事故の場合、モスクワからジョーの手書きによる手紙が届いたことは、例のランキングにインパクトを与え、C₄（スパイ活動対抗結論）は、他のものよりも容易に、この事実を説明することになる。このような場合を「説明して取り除く（explain away）」(p.107)と表現することにする。「溺れた」という対抗結論（C₃）は、例の手紙が捏造であるか偶然であるという何らかの筋書を語ることによって、スパイ活動対抗結論を説明して取り除かねばならないだろう。この筋書は溺れたという対抗結論の一部となり、この場合、捏造または偶然という筋書を支える新情報が出てくるまでは、その尤もらしさは低いままである。説明するのがより困難あるいはより容易になるというのは、新情報がPRを変化させる一つのやり方である。

新情報は、ランキングを別の仕方でも変化させる。例えば、ジョーが軍事産業で働き、最近その機密文書を盗み、KGBと密接に繋がっていたとするなら、これもまた関連的になるだろう。これはPRに明らかにインパクトを与えるものの、全く違う仕方を与える。この新情報は、諸対抗結論が説明する（または説明して取り除く）ところのものではない。諸対抗結論は、ジョーがなぜそこで働いていたのか、どうやってKGBに関わるようになったのかについて何も語る必要はない。むしろそうではなく、ジョーに関するこのあらゆる背景の関連性は、スパイ活動対抗結論に関して、元々のデータをより容易に説明してくれるという事実にある。これは、われわれの理解を変えてくれて、他の仕方では奇妙だった説明が、この特殊な場合では、さほど奇妙ではないことを分らせてくれるのである。こうして、ランキングは刷新されるのだが、これは何か説明すべき新しいものがあるからではなく、説明の際に手に入るものに対して「新しい捉え方（a new appreciation）」(p.108)を得たからなのである。

データがPRに対して関連的でありうる二つの仕方（つまり、「自ら説明

される」と「他のものの説明を手助けする・妨げる」)は、新情報だけでなく、元々の「証拠」にも適用される。元々のデータは自ら説明されるかもしれないし、他のものを説明する手助けをするだけかもしれない。概して、証拠には二つの異なる種類のものがあることになる。つまり、**DA では二つの異なる種類の支持 (support) がある (p.108)。**

この区別を付ける最も良い方法は、或る特定の診断的な問いに焦点を当てることである。これは「何が起きたのか?」が最も代表的な問いとなるだろう。このIQを持つDAは当然のことながら、何かが起こったことを示唆する情報でもって始まる。先の実験事故の例だと「空っぽの手漕ぎボート」は、「何が起きたのか?」という問いを引き起こす。こういった物事は、「起きたこと」の一部として現れて、何であれ起きたことの側面や結果(つまり、それ自身を超える物事についての証拠)として現れているので、何かが起きたことを示唆している。こういった物事を、ライトは「**痕跡データ (trace data)**」(p.108)と呼んでいる。これはつまり、われわれがもっと知りたい何事かによって残された痕跡のことである。

対抗結論はここでは説明であり、起きたことを説明しようとするものであるのを思い出すなら、痕跡は対抗結論が説明しようとする物事であるのは明白である。何が起きたのかの説明の際に、各々の対抗結論は、例えば、「なぜボートが空っぽなのか」を説明せざるを得なくなる。**痕跡データとは、対抗結論が説明すべき物事なのである (p.109)。**

だが診断的支持の中には、説明の際に手助けするだけで、対抗結論によってそれ自身が説明されることがない単に有益で関連的な背景となるものもある。こういったものを、ライトは「**非痕跡データ (non-trace data)**」と呼んでいる (p.109)。例えば先の実験事故の場合、なぜ当時、大西洋が嵐だったのかは、たとえ嵐が対抗結論のランキングに明らかに関連しているとしても、対抗結論がそれを説明することはない。

痕跡は常に**対抗結論による (by)** (p.109) 説明を含むが、この関係を表現

する最良の仕方は、適用の場面ごとに揺れ動く。以下は、そういった場面の記述となる。僅かな痕跡であれ、対抗結論が説明しようとする物事である(例:「空の手漕ぎボート」という痕跡)。痕跡は、それが探求するのに十分なほど重要であるなら、筋書の一部として説明される(例:「手漕ぎボートの正確な位置」という痕跡)。痕跡はしばしばより強烈で、結論を深刻に受け取る場合、その対抗結論が**説明しなければならない** (*must*) (p.109) ものである(例:「モスクワからのジョーの手書きの手紙」という痕跡)。対抗結論の中には、補助的な筋書を追加することで、痕跡を直接扱うというより、痕跡を説明して取り除こうとするものもある。以上のことより総じて言えるのは、**痕跡とは、対抗結論により様々な仕方で説明の際に関わることになるありとあらゆるものである。痕跡でない他の情報は、説明過程における背景 (background) の役目を果たすことで、論証の関連的な部分となりうる** (p.109)。非痕跡データは、それが痕跡を説明しようとする際に、別の対抗結論を手助けする(または妨げる)場合、PR に対して関連的となる。

以上を踏まえて、今やより具体的な特徴付けを DA に与えられる。DA は、**痕跡データを含む論証である** (p.109)。対抗結論が説明すべきデータを提供するどんな論証も、診断的となるのである。**典型的な DA は、痕跡と非痕跡の両方の支持を有し、痕跡データは様々な説明様式となって現れうる**のである (p.109)。

一般に、新情報を加えて PR を変えるとき、物事についてのわれわれの理解を、多かれ少なかれ、変えているのである。先の海難事故の場合だと、ジョーの遺体が見つければ、以前の理解(「ジョーは溺れた。」)を固めることとなり、モスクワからのジョーの手書きの手紙が見つければ、以前なら奇妙だとして看過されてきたものを深刻に受け取ることになる。

新発見が通常の期待とはかけ離れたものであればあるほど、この事例についてのわれわれの理解はより大きく変化する (p.111)。図式化と診断的道具立ての全ての側面は、このような変化の結果としての「**変容 (modification)**」

(p.112) に開かれている。最後に、上記の探求の過程の際に見られた「**痕跡と背景の間の共生的交換** (the symbiotic interchange between trace and background)」（p.119）は、探求の際の鍵となる特徴である。つまり、**一方で背景はわれわれが痕跡を探すのを手助けし、他方で痕跡は必要とされる背景、つまり教育を示唆するのである** (p.119)。この交換関係が、追及に焦点を当て、単一の筋書へと収斂するのを可能にするのである。

第3節 診断的論証における非言語的要素

3.1 『実践的推論』における非言語的要素の言語的明瞭化

ライトの DA はもう一つの目的を持っている。それは、**われわれの推論における非言語的な要素を、より言語的に明瞭化するための手助け**をすることである。この点は、『実践的推論』の「言語的明瞭化」という節 (pp.119~127) で詳述されているので、この箇所を見ていく。

ライトは、痕跡データを分離することは、われわれの「**言語的明瞭化** (articulation)」（p.119）を容易にする、と言う。そして、これはまた、われわれの健全さの判断を表現する扱い易い仕方を提供する。例えば、論証がその結論としての C_3 でもって健全だと考える場合、「 C_3 は痕跡データの最良の説明である」から、そうするのである。また痕跡データは、次のように PR における特定の痕跡のインパクトを説明できるかもしれない (p.120)。

一方で C_3 は S_4 を難なく説明するので、 S_4 は C_3 の尤もらしさを高める。

他方で、 S_4 は C_4 に対するかなりの障壁 (hurdle) を表現している。

このことは、前節までに扱われてきたことだが、支持の残りの部分（非痕跡データ）の役目を言語的に明瞭化するのは、より難しく複雑である。

対抗結論によっては説明されない情報は、痕跡を説明する試みにおいて対抗結論を手助けしたり妨げたりするなら、診断的探求にとって関連性を持つ

ている。よって、特定の事例でのこの役割を言語的に明瞭化する言明とは、例えば、次のようなものになる (p.120)。

S_3 は、 C_6 が S_4 を説明するのを手助けするから、関連性を持っている。(S_3 is relevant because it helps C_6 explain S_4 .)

この定式化は豊かであり、また誤解を招き易いほど単純でもある。と言うのも、「手助けする (help)」は非常に多くの可能性をカバーするからである。

一例として、科学での例を考えてみる。 S_3 は、 C_6 が S_4 を説明しうる仕方を示す。だが「仕方を示す (showing how)」(p.120)はずっと複雑な事柄となる。例えば、火星探査機のスコopアームが故障した (S_4) とき、「小部品が全体を動かなくしている。」(C_6) が一つの対抗説明である。そしてシミュレーション上の実験 (S_3) は、この小部品説明が火星での痕跡データを説明しうる仕方を示すためにもっぱら行われた。このように、科学において「仕方を示す」といった類のものは、数学者のチームや数日に亘る計算を含みうるのである (pp.120f)。だが対抗説明を手助けすることの意義はまた、障壁を取り除く (または低くする) ことにもある。各々の「手助けする」は、これと並行して「妨げる (hurt)」(p.121)にも当てはまる。非痕跡データは、対抗説明が、全くもって難なく、或る痕跡に対する説明ではありえない (*cannot*) ことを示すかもしれない (p.121)。こうして、綿密な科学による計算は、理論が間違った答えを与えることを示せるのである。

こういったものは、DA の諸側面を言語的に明瞭化するためのより共通した仕方である。だがここでの資源を、より一層微妙な言語的明瞭化のために使用することにする。われわれがなぜ或る物を別の物の痕跡として見なしているのかを理解できない人がいるのなら、或る物と別の物の痕跡とを繋げている何らかの背景を与えることで、これを説明するかもしれない。つまり、当の背景とは、「われわれがなぜ、この説明を最良のものとして選ぶのか」

である。ライトは、オイル漏れに関する問答を例に挙げて、これを説明する。窓から外を見ると道路に真新しいオイル漏れがあるのを私は発見した。そこから「ゴミの収集があった。」と私は推論するのだが、あなたは「なぜそうなのか？」と尋ねる。そこで、ここでの背景についてあなたに説明することで納得させる。この二人は「痕跡データ（知覚）」こそ共有しているが、「非痕跡データ（背景）」を幾らか共有していないために、このようなギャップが生じたのである。この問答はギャップを埋める作業となる。

われわれがなぜ日頃行う仕方で見方世界を見るのかを説明しようとする、自身の言語的明瞭化能力の限界に気づかされる。つまり、有意義に語る術が尽きているのである（例：オイルが道に垂れていることを、なぜ、ゴミ収集車が来たサインだと私が見なすかを説明できるが、道路で見たものが、どのようにして、私にとってオイルが垂れたものであるのかを示すのに有効な弁明を持っていない）。われわれの生活では通常、説明は未分析の知覚（unanalyzed perception）でもって終わる。われわれは自身の基本的な理解（basic understanding）に到達し、そこで終わる。そして幸運なことに、ほぼ常にこれで十分なのである。つまり、物事についてわれわれの基本的な理解の大部分は、広く共有されている（p.122）。なぜそうなのかと言われても、われわれは困惑するだけである。と言うのも、基本的な知覚についての体系的な語り方を有していないからである。基本的な知覚を誰かに説明しないとイケないのなら、その語り方を「発明」しなければならない。また、メタファーや想像といった知的な資源に頼らないとイケない。さもなくば、「どうやって知ったのかわからない、ただ知っているだけ」となってしまう。

全ての**基本的な技能**（basic skill）（例：歩く、運転する、バットを振る）も同様に**言語的に不明瞭**（inarticulate）である（p.122）。修得の際に伴われる語りは、当の技能を記述しないし、またそれは何をすべきかを説明するよりは、むしろ或る仕方での指南を与えるものである。本質的なところでは、例えば、運転の仕方を上達させるに過ぎないなのである。確かにわれわれは

これらの**実演** (performance) (p.122) について語ることはあるのだが、この語りは常に実演を貶めることになる。われわれはこういった仕方について記述するための語彙を持ち合わせていないのである。

哲学者はこの種の困難（**言語的に明瞭化されえないものを言語的に明瞭化する** (articulating the inarticulable)）と常に格闘してきた (p.122) と述べて、ライトはこの知恵を拝借しようとするのだが、その際に（表向きは全く言及していないものの）ライルの『心の概念』に依存することになる（本稿注6を参照）。つまり、「**傾向性** (disposition)」（p.122）という概念である。物事が或る状況においてどんな傾向を示すのかに訴えることで、われわれの理解をしばしば言語的に明瞭化できるだろう。われわれは常に物事を、時には状況ですら、特定化できる。物事がどんな傾向性を示すかを記述する仕方に同意する必要があるだけである。そして、この記述の際にはしばしば「**努力** (effort)」や「**想像** (imagination)」が要求される (p.122)。

単純な傾向性とこれに基づく説明は、われわれの通常の会話の一部を成しているとして、ライトは「**脆さ、壊れ易さ** (fragility)」（p.122）という傾向性概念を例に挙げて説明する。われわれの物事の理解の一部として、「或る物は脆い、或る物は粗雑に扱おうと壊れ易い。」という認識がある。その際、三つの要素を共に等しく扱っている。つまり、「**対象** (objects)（ガラス製の花瓶）」、「**状況** (circumstances)（粗雑な扱い）」、「**何かをする傾向性** (disposition to do something)（粉碎する）」という三つの要素を特定できる (p.123)。これらの特徴付けに対して有益な説明を提供するのに十分なほどに、これらの特徴を誰もが理解している。「脆さ」という傾向的性質に訴えることで、私が対象を大事に扱うことを容易に説明できる。また、「粉碎する」や「粗雑な扱い」が何であるかを、あらかじめ余すところなく特定化できないにしても、容易に説明できるのである。われわれはこういったものを、どのような特別な扱いが要求されて、なぜそうなのかを十分に理解できる程度には理解しているのである。

傾向性にアピールすることのポイントは、「**何事かを述べるのが全くもって難しい事柄を、言語的に明瞭化する仕方** (way to articulate things that are difficult to say anything about at all)」を与えることにある (p.123)。思うように全てを語るができないからといって、傾向性を軽蔑するという誘惑に抵抗しなければならない。**傾向性は、われわれの物事に対する複雑で微妙な理解において、肌理が粗いが役に立つパターンを表現することを許してくれる**。このことは、他の仕方ではしばしば蔓延している言語的不明瞭さに対する**明確な改善なのである** (p.123)。

このように見てくると、DA がわれわれの推論において果たす役割がいかに深いものであるかが分かる。と言うのも、われわれは、自身の傾向的見取図のための支持を、DA として再構築できるからである。つまり、**傾向性があると**言えるのは、**傾向性がわれわれの経験の或る種の特徴についての最良の説明だからである** (p.124)。花瓶のような物事を伴うわれわれの経験は、「それらは、複雑だが一貫して [割れるという] がっかりさせる仕方でもって、粗雑に扱うことに反応する」というものである (p.124)。この経験についての最良の説明は、これらの物事は、あのように反応する傾向性、つまり「脆さ」とわれわれが呼ぶ性質を持つというものである。

傾向性に基づく説明は「**対比説明 (contrast-explanation)**」 (p.124) だが、ここでの対比はとても穏当なものである。「脆さ」は実際「**当の花瓶の何らかの性質が、破損のパターンに関わっている** (some property of the vase is involved in the pattern of breakage)」 (p.124) を意味している。これは、全体的な要因 (例：陰に誰かが潜んでいて、私が少しでも手荒に扱おうとするなら、超音波を発して花瓶を割る。) との対比である。これもまた当のパターンを説明するのだろうが、尤もらしさはほぼない。「脆さ」は単に「それは花瓶のせいである。」ということ述べるに過ぎない。もし、この花瓶がこの点において異なるのなら、そのパターンもまた異なるだろう。この点については、われわれは膨大な証拠を有している。或るパターンは或る説明を要

求し、別のパターンは別の説明を要求する。われわれの主張はとても穏当なので、部分的にはとても確かである。だが、このような穏当さは言語的明瞭化の価値を貶めることはしない。

ライトによれば、こういったことの全ては診断的形式で図式化できる (p. 125)。このパターンは「痕跡データ」であり、他の多くのことは「**関連した背景 (relevant background)**」(例：「手荒い扱いを慎重な扱いから区別するわれわれの能力」「物事を、関連した観点において同様のものと認識できるわれわれの能力」となるだろう (p.125)。

<p>S₁ : 或る特徴、外見、歴史を持った対象とのわれわれの経験における損傷の パターン [痕跡データ]</p> <p>S₂ : 一般的な関連する背景 [非痕跡データ]</p> <p>----- d</p> <p>C : これらの対象は脆い。</p>
--

対抗結論は、脆くない対象の場合に当のパターンが起きるかもしれない全ての多様な仕方となるだろう。「偶然の一致 (coincidence)」、「陰謀 (conspiracy)」、「諸条件の下手な同一化 (incompetent identification of conditions)」がその例となるだろう (p.125)。例えば、先の「陰に誰かが潜んでいて、私が少しでも手荒に扱おうとするなら、超音波を発してこれらの対象を割る。」は、陰謀対抗結論となるだろう。

脆さは「**受動的な傾向性 (passive disposition)**」(p.125) とでも呼べるものである。つまり、当の対象に引き起こされるところの傾向である。だが或るものは、もっと「**能動的 (active)**」(p.125) である (例：近づいたら飛んでいく野生動物)。人格についてのわれわれの理解の一部は、挨拶や要求や会話での振舞いに対して或る仕方または別の仕方に対応する傾向性から成り立っている。

もちろん、その人は「常に」そうであると語られねばならないわけではない。例えば、「**気難しい人 (sourpuss)**」は、特定の場面で選択的に現れうる

ものでもある。そして気難しさは、たとえわれわれがそういった状況について多くを語れないときですら、例えばチャーリーについてのわれわれの理解の客観的な側面でありうる。これは、われわれの知覚や生活の莫大な複雑さにおけるパターンを言語的に明晰化するのに十分適したものにさせる傾向性の別の側面でもある。われわれは、物事の全ての振舞いを、自身では記述できない諸条件下でも明確に認識できている。そして、これらの認識は説明において使われうる。例えば、暗がりでの光の条件の下でも、言葉に表現できない仕方で、光の少しの変化によって靴下の色を識別できる。チャーリーの人格の場合も同じく、或る条件下では気難しいわけではない。気難しさと光の場合と同じく、われわれはそれについての真相を分かっているものの、診断を下せるほど特定化する必要はないのである。

申し分なく有用な説明であるためには、先述した三つの傾向的要素（つまり、「対象」「状況」「傾向性」）の内、二つを明確にすることで十分である（p. 126）。

1：当の対象 2：その対象の傾向性の内実

「光の中でそれを振り回せば、その色が遂には分かることだろう。」は、あなたの知覚に関する能力の一つの側面を説明しており、あなたの理解の一部を言語的に明瞭化している。また「彼は、その機会があれば、常に悪い側面を強調する。」という性格表現での例の場合には、「機会」の例を挙げる以上のことはできないかもしれないが、それでもこの例はわれわれの理解の重要な部分を有意義に説明している（spell out）（p.126）。

われわれの理解の客観性は、もっぱら正しく理解する（get it right）（p. 126）ことに関わっている。そして、正しく理解するのは、そのまま診断的振舞いなのである。だが、そうすることがここでの問題なのではない。人間は、色や人格を極めて一般的に知覚する能力に富んでいる。ここでの問題は、これらの知覚を言語的に明瞭化する仕方なのである。

傾向性は、われわれの推論を言語的に明瞭化できるところの水準を深める

ことを目指している。われわれは、自身の物の知覚に関する肌理の粗い傾向的な解釈に訴えて、例えば、なぜ或る現象を痕跡データと見なすのか、またはなぜ或る現象を自分の行為の痕跡と見なすのかを説明することだろう。例えば、道脇のベンチに腰かけていた人が、意図的に立ち上がり、道を注意しながら見ていたとしよう。私はこの行動を、「近づいてくるバスについての証拠」という痕跡データと見なす。私は、自分の知覚を共有していない人に対して、その状況（道脇のベンチが典型的なバス停留所であること）についての背景（前者）か、または「バスが近づいてくるとバスを持つ人はどんなことをする傾向があるのか」についての背景（後者）を提供することで、この理由を説明できる。前者の場合は「ベンチ」「道脇」といった概念がそれ自体を示唆するので、容易である。後者の傾向的な表現の場合は、理解可能な仕方で行動を特徴付けるには想像力を必要とするので、より難しい。だが「**意図的な (purposeful)**」や「**興味深い (interested)**」といった概念にひとたび目を向けた (fall on) なら、説明はより容易な事例へと進んでいく (p.127)。と言うのも、「**人々と共有できるわれわれの経験 (our common experience with people)**」 (p.127) は、このような仕方で人の行動の諸側面に注意を向けるのを可能にするからである。立ち上がるという確認できる仕方や凝視するという馴染み深い仕方は、これらの状況での最良の説明としての「バス」の接近を示唆する。これらの概念の識別や言語的明瞭化は、「私はどうするのか知らない、ただ知っているだけ」を越えて大きな前進を表している。

バス停留所の例での諸特徴は、日々の営みの中で絶えず行っている診断的推論の典型である。われわれが基本的な知覚に達している場合、その状況については普通、言うべきことは少ししかないが、そこに横たわっている因果的パターンは、それを言語的に明瞭化しようとする苦勞する。そこで傾向性が手助けするのである。この場合、われわれが必要とするは、非常に粗い傾向性に関する捉え方 (dispositional appreciation) (p.127) なのだが、われわれはこれをこれまでの経験を通じて熟知しているのである。

このようにライトは、傾向性の概念を介して、ラフではあるが「言語的に不明瞭なものを言語的に明瞭にする」ことを DA の枠内で試みるのである。

3.2 非言語的要素としての理解と能力—『実践的推論』以降

以上見てきたように、『実践的推論』においては、「理解」と「能力」が主體的に論じられているわけではない。しかし、この両者は頻出しており、もちろん DA における「理解」と「能力」の重要性は論を待たない。したがって、この両者について、『実践的推論』以降の以下の諸論文を取り上げ（これらにおいても、やはり主體的に論じられているわけではないが）、「非言語的要素（the inarticulate）」という観点から、更に詳しく検討したい。

- ・ 1995 年論文：Argument and Deliberation: A Plea for Understanding
- ・ 1999 年論文：Reasons and the Deductive Ideal
- ・ 2001 年論文：Justification, Discovery, Reasons & Argument
- ・ 2002 年論文：Reasoning and Explaining
- ・ 2011 年論文：Explanation, Contrast, and the Primacy of Practice
- ・ 2013 年論文：Epilogue
- ・ 2019 年論文：Reasons

3.2.1 非言語的な暗黙知、身体知とは

非言語的な（inarticulate）知とはどのようなものか、確認することから始めたい。ここでは、非言語的な知を、「推理（reasoning）」や「判断（judgment）」といった認知的知（非身体的な知）と身体知に分けて、考察していく。まず、推理や判断（非身体的な知）における非言語的な要素の方から見てみよう。

非言語的な知の内の認知的な知は、例えば、次のような推論において働いている。海の上に顔を出している岩に付いた赤いペンキは、大型船がその岩に接触したと考える十分に良い理由（good reason）であり、また、山に大雪が降っていることは、われわれが海岸沿いのルートを取るべきだと考える良い理由になる（[1995] p.565）。これらが良い理由であると判断するためには、

われわれは関連する無数の事柄を知っているものでなければならない。例えば、赤いペンキを見て大型船が接触したという把握は、岩、海水、鉄板、海の旅行、海底の安定性、被造物と神々の動機と有能さ等々の「広範な理解 (vast understanding)」に依存している ([1995] p.570)。このような「岩、海水、鉄板等々」の理解が、「大型船がその岩に接触した」という判断 (結論) を支えているのであり、このような「理解」は、その判断を下す際には非言語的で、背景的な暗黙知として働いているのである¹⁹。

次に、非言語的な身体知の例を見てみよう (ただしライトは「身体知」という言葉は使っていない (本稿 4.2 節も参照))。例えば、それは、緊急時にブレーキを踏む、パンチをよける、あるいは叫んで注意する ([2002] p.42)、スパナ (レンチ) を回す、野球のバットを振る ([1995] p.571) という行為、あるいは訓練やヨガによって身に付ける動作であり ([1995] p.582)、これらは非言語的な身体知である。このような行為の本質的なことは、「まず初めに止まって考えるということをしな^い (not stop to reflect first)」ということであり、非反省的で、「**反射的な行為 (reflex actions)**」であるということである ([2002] p.42)。われわれは、反省的思考 (reflect) を働かせる時間がないような事態に対して、我がものとした能力…をもって、(上記の緊急時にブレーキを踏む等の) 行為を行うのである ([2002] p.42)。

このような、非言語的な知 (非身体的な知と身体知) が、われわれの日常生活において重要な働きをしているわけだが、この点については後で (3.2.5 節) 見ることにして、先に非言語的で非反省的である、「理解」と「能力」について詳しく見てみよう。

¹⁹ 新聞がたまっていること (理由・根拠) から隣人が出かけていると結論し、山に雪が降っていることから海岸沿いのルートを取るべきだと判断する等も同様 ([2019] p. 753)。本稿の 3.2.3 節も参照。なお、「海の上に顔を出している岩に付いた赤いペンキ」は痕跡データに、「岩、海水、鉄板 ---」は非痕跡データに相当する。

3.2.2 「理解」の非言語性について

「理解」とは、われわれが現実世界と接する中で修得してきた「様々な物事間の繋がり (connection between different things)」の把握や、「世界がどう動いているかについてのわれわれの偶発的・経験的把握 (our contingent grasp of how the world works)」のことである。ライトは、「理解」の非言語的性格について、「**理解は常に言語的明晰化を上回っている。(understanding always outstrips articulation.)**」と述べ ([1999] p.201)、また「われわれが理解し行うことは、本来的には命題的ではない (not intrinsically propositional)」 ([2019] p.755) と述べている。

このような「理解」の内に、われわれは無数の関連する知を蓄えている。車の予想外の停止に関連して、新聞がたまっていることに関連して、雪の情報に関連して、「われわれは、支持 (support) を十分な理由・根拠を与えられたものにするために要求される無数の詳細を、容易に理解し、おおむね識別している²⁰」 ([2019] p.753)。

このような「理解」が含む無数の非言語的な知に対しては、「**背景 (background)**」的という言葉方もされる。例えば、計算の試験問題に取り組む場合、われわれは「**広範な背景 (a vast background)**」を前提としている。つまり、計算の理解度を問うテストでは、試験を受ける者は既に試験のやり方、その目的、時間や行動における制約を知っていなくてはならないし、試験用紙と鉛筆をどのように扱うべきか、試験用紙のどの面を見ればいいのか、試験を受ける者は正しい答えを得るようにすることを求められていること等々、数限りない背景的知を前提にしているのである ([2011] p.91)。このような背景は、「**包括的背景 (comprehensive background)**」 ([2019] p.758) とも言われている。

そのような関連する知 (背景的知) は、長い間に定着した確信であり、これに基づいてわれわれは物事を理解し、行動するのである。ライト自身の

²⁰ 支持 (support) については、本稿第2節を参照。

言葉を確認すると、「われわれは、われわれの長い間に定着した確信 (our settled convictions) に基づいて、物事を理解し、物事を行うことを決める」 ([2019] p.755)。この「長い間に定着した確信」は、「長い間保持している確信 (long-held conviction)」 ([2019] p.760) とも言われている。

そのような関連する知は、無言の内に蓄積され、一般的な「理解」の内に蓄積されるのである²¹。

3.2.3 「能力」の非言語性について

「能力」とは、「理解」に基づいて「われわれの周りの状況に対処する何らかの認知的・行為的活動のことである」。能力も「非反省的」であり、われわれはこの能力によって「自動的に (automatically)」 ([2002] p.42) 様々なことに対処する。例えば、「われわれは挑戦的でリスクな行為 (車の運転、手術、警察の仕事等) を行うときには、或る種の能力を保持し実践する責任を持っている。われわれが……このような文脈で行うことのほとんどは避けがたく非反省的であり (inevitable unreflectiveness)」 ([2002] p.43) と述べられている。また、これが「自動的に」に作動するという点については、「われわれは、人生の緊急事態に自動的に (automatically) 対応する様々な能力 (various competences) を持っている。…例えば、ボールが転がってきたのでブレーキをかけた等」 ([2002] p.42) と述べられている。

「能力」の作動の仕方について同様の表現は多く、「楽々と (effortless, effortlessly)」 ([1995] p.570, [1999] p.198, [2001] p.98)、「深く考えることなく (without deliberating)」 ([1995] p.567)、「暗黙の裡に (blindly)」 ([1995] p.568)、「直接的な (unmediated)」 ([1995] p.570)、「暗黙の (tacit)」 ([1995] p.571)、「一瞬のひらめきの内に (in a flash)」 ([2002] p.42) 等の表現が多く見られる。

このような、例えば、車の運転といった非反省的な能力の作動に際して、

²¹ 説明するという行為 (explanatory practice) は、無言の裡に蓄積される理解 (understanding accumulated mutely) —その行為と並んで持続する蓄積 (accumulation) —との相互作用から発達する ([2011] p.91)。

われわれは十分に良い理由で正しいことを行っている。このような非反省的行為の背景をなすものはゆっくりと蓄積されていく「技能 (skill)」であり、それらは上手く働いており固定化されていく。それらは機能としてベストでなくても、十分に有用なものであればよい。少々長くなるが、ライトの言葉を要約する形で次に確認しておこう。つまり、車の運転といったこのような非反省的なケースでは、このような行為が非反省的な (unreflective) 日常的行為になった後も、われわれは十分に良い理由で正しいことを行っている (doing the right thing for a good reason)。背景 (background) をなすものは、一種の自然的な選択である。われわれは、しばしば試行錯誤によって、諸々の技能をゆっくりと蓄積していく (we slowly accumulate skills)。役に立つ反応と日常的行為は、それらが上手く働いているので、固定化していく (stick)。その際、それらはわれわれの二重の why による問いに対する最高の (optimal) 答えである必要はなく、単に機能上の (functional) ものであればいい。人が考えるかもしれないベストなものでもなくとも (even if not the best thing)、為すべき十分に良いもの (good thing to do) であればよい ([2002] p.43)。

繰り返しになるが、確認すると、われわれは車の運転といった非反省的な能力の作動に関して、蓄積され固定化した技能によって、十分に良い理由で正しいことを行う。そして、この行為は、最高のもの、ベストなものでもなくともよく、正しく機能し、十分に有用であればよいのである。

「能力」は、もちろん、以上のような身体的能力だけではなく、推論や判断といった能力もわれわれは保持している。これらの能力については、次の 3.2.4 節にて検討したい²³。

²² 「最高の答えである必要はなく…ベストなものでもなくとも、為すべき十分に良いもの (good thing to do) であればよい」という考え方は、本論文では考察をほぼ省いているが、われわれの「最適解」の考え方 (吉満・浜崎 [2019]) とも重なるものと思われる。

²³ 能力について、sharable と言われていることにも、注意しておきたい。‘a sharable competence at distinguishing good and bad ways to come to think something is the source of its normative force’ ([2019] p.759) . ‘a competence is shared’ ([2019] p. 759) . 当然のことながら、能力が (理解も) 共有できなければ、問答は基本的に成り立たない。

3.2.4 理解と能力の関係

理解と能力の関係は、基本的に、「事物に関するわれわれの一般的な理解…それがわれわれの能力を下支えし適切に整えている（…our general understanding of things …It is what underpins and coordinates our competencies.）」（[1995] p.570）というものであると言える。

そして、論証（argument）との関係で言えば、一般的理解はわれわれの反省的思考（reflection）において、種々の熟慮する能力（various deliberative competency）と共に、論証に明瞭性と価値を与えることができるものである（[1995] p.571）。この点については、「われわれは、推論が上手くいくために要求される理解と能力を自然に獲得している。」（[2019] p.759）という言い方もされている。つまり、理解が能力を下支えしているだけではなく、この両者は合わさって、言語的な反省的思考を成り立たせ、論証を成り立たせているものでもあるのである。

更に、行為（practice（[1995] p.573）, action（[2002] p.42）, activities（[2002] p.43）, maneuver（[2013] p.243）etc.）との関係に関しても、やってみるに値する（good）行為は、利益と価値（interests and values）だけでなく、それを遂行することのできる「能力」（“competence” : its general level of ability to pursue its ends）にも依存している（[2013] p.243）と述べられており、能力（したがってこれを支えている理解も）は、当然のことながら、行為をも可能にするものである。

もちろん、適切な論証と行為のためには、理解と能力は或る一定のレベルに達していなければならない。では、理解と能力はどのようにして獲得され、増大させることができるのだろうか。理解と能力の獲得については、われわれは、話し合い互いに交流する社会で成長することにおいて、理由・根拠を与える実践が上手くいくために要求される理解と能力（understanding and competence）を自然に獲得している（we all naturally acquire）（[2019] p.759）と言われており、また、理解の真の増大（increases）は、学習、練習、訓練、経験（study, exercises, training, experience）といったハード・ワーク（hard

work) を必要とし ([1999] p.201²⁴)、それによって更なる能力と理解 (additional competence and understanding) が得られるのである ([1999] p.201) と言われている²⁵。

3.2.5 言語的知（推論、判断等）と理解・能力（非言語的）との関係

では次に、推論や判断といった言語的知と非言語的である理解と能力の関係について、見てみたい。

「推論 (reasoning)」については、「われわれの推論は、全く明らかにわれわれの一般的な能力と理解に基づいている (Our reasoning is most starkly dependent on our general competence and understanding)」（[1995] p.571）と述べられている。この点について99年論文 (p.204) では、端的に「非明示的論証は、人間の行う推論において明瞭で有用な役割を果たしている。(Nondemonstrative arguments play a clear and useful role in human reasoning.)」と述べられている。

「判断 (judgment)」についても、「われわれの日常的・現実的な判断の多くは、[人] 生のスムーズな流れの中で、その判断を熟慮の対象や言語化されたエピソードとして取り出すことなく、行われている。」 ([1995] p.567) と述べられており、やはり、そのような「判断」の多くは非言語的で反省的である。

ライトはそこから更に、「われわれが科学において学ぶものの客観性も、「世界がどのように動いているか (how the world works) ²⁷」ということのわれわれの日常的な理解の客観性 (the objectivity of our everyday understanding) に避けがたく依存している。」 ([2011] p.92) と言う。科学の客観性は、もちろん言語的なレベルのものであり、われわれの日常的な理解の客観性は非言語

²⁴ 95年論文 p.582 では、study, training, experience, or yoga となっている。

²⁵ とは言っても、獲得は自然に、増大はハード・ワークで、と分けて捉える必要はないものと思われる。

²⁶ 99年論文 p.201 では、「…非言語的であるというだけでなく、言語化できないものである理解に基づいている推論… (…reasoning resting on an understanding that is not just inarticulate, but unarticulable.)」という言い方もある。

²⁷ ライトは「世界がどのように動いているか (how the world works)」という言い方をよく用いており ([2011] p.90, [2019] pp.755f, etc.)、またこの世界を「流れている (flow)」 ([1995] p.567, [2002] p.41) と捉えている。この点については、次回に詳述したい。

的に蓄えられており、科学もそのような日常的な理解に基づいているのである。

そして、「流れている (flow)」 ([1995] p.567, *etc.*) という仕方で動いている世界の中で「動き回る (knock about)」 ([2011] p.90) ことで、われわれは非言語的な理解と能力を獲得し、育て、更に、本稿 3.1 節で見たように、物や人の持つ「傾向性」の把握に基づいて、言語化 (分節化) し、言語的知として明瞭にし、推論や判断を行うのである。

第4節 考察と展望

4.1 考察—診断的論証、アブダクション、非言語的要素

第2節で見てきた DA は、C. S. パースの「探究の論理 (logic of inquiry)」 (吉満・浜崎 [2020] 第2節を参照) での「アブダクション (abduction)」の箇所 (本稿末尾の図の左側を参照) を詳述し、その内実を与えていると言っても過言ではないだろう。探究の論理とは、科学的探究を演繹・帰納・アブダクションの三種の推論から捉えたものだが、ここで関係するのはアブダクションである。これは「ある驚くべき現象の観察から出発し、その現象がなぜ起こったかについて何らかの可能な説明を与えてくれる仮説を考え出す」 (米盛 [2007] 104 頁) ことである。そして、そこでの仮説の提案について、パースは二つの段階からなると考えている (米盛 [2007] 49f 頁、66~72 頁)。つまり、「アブダクションは最初にいろいろな仮説を思いつく示唆的 (洞察的) 段階とそれらの仮説について検討し、そのなかからもっとも正しいと思われる仮説を選ぶ (あるいは、それらの仮説のほかにもっと適切な仮説がないかどうかを考える) 熟考的な推論の段階」 (米盛 [2007] 50 頁) とからなり、第一段階は洞察、閃きによる仮説の提示、第二段階はそれらの仮説から

²⁸ 吉満・浜崎 [2020] の末尾の図を参考。なお、パースの原著は紙幅の都合上挙げないが、米盛 [2007] や吉満・浜崎 [2020] を参考にせよ。

最も理に適った、最も正しいと思われる仮説の選択であるとも言われている（米盛 [2007] 68 頁）。こうしてアブダクションは、「示唆的段階」（第一段階）と「熟考的な推論の段階」（第二段階）とからなるとされる。

アブダクションは別名「最良の説明への推論」でもあるだけに、上記の点はライトの DA でも或る程度、当てはまる（末尾の図を参考）。まず、パースの驚くべき事実は、「IQ への気づき」に相当し、示唆的段階は、「論証の発端、ステージ I（追及を導く糸）」に相当する。パースの熟考的な推論の段階は、彼は新情報による探究の変容について特に明示していないので、対応づけはできないが、敢えて言うなら「ステージ II からステージ III に至るまでのプロセス」に相当する。そして、パースの「仮説決定」は「ステージ IV」（健全な DA）に相当する。しかも、パースでは詳細にされていなかった「熟考的な推論の段階」を、ライトの DA では、探求と発見のダイナミックな過程（Wright [1989] p.105）として詳述しているのである。この点において、パースの探究の論理、延いては科学における「発見の論理」に対する一つの解明を与えているものだと思える。いずれにしても、論証を出来上がったプロダクトとして見るだけでなく、そこに至るプロセスとしても扱っている点が、DA の利点だと言えよう。

次に、ライトの DA は、CT における非言語的要素をはっきりと組み込んでいる点において、より日常的な推論を扱おうと試みる CT に大きな貢献をしているものと思われる。科学哲学では、末尾の図での「背景」は、「**補助仮説群**（auxiliary hypothesis）」などと呼ばれているが、これは言語化された命題の集まりと解される場合がある。だがライトの場合、この背景には「補助仮説」はもちろんのこと、「理解」や「能力」といった非言語的要素も含んでいる。この点において、DA はより日常的な推論を扱おうとする CT または非形式論理学へとより一歩近づいているように思われる。このような動向は、近年「**身体性クリティカル・シンキング**（embodied critical thinking）」として注目されてきているだけに（Schoeller & Thorgeirsdottir [2019] を参照）、

DA もこれに寄与できるものと思われる（本稿 4.2 節の前半も参考）。

4.2 展望

以上、われわれはライトの DA とその非言語的な要素について、論じた。以上を踏まえて、最後に、展望として三点ほど述べておきたい。

一つ目は、上で述べたように、ライトは DA、そして理解と能力における非言語的な要素について語る際に、「身体知」を暗黙知の裡に含め（もちろんこれはこれで正しい）、特に身体知として論じているわけではない。そこで、身体知について今後更に詳しく検討するためにここでは、「身体の守護聖人²⁹」とも言われるメルロ＝ポンティの関連する考え方の要点をごくごく簡単にではあるが、確認しておきたい。

メルロ＝ポンティは、「語られたコギト (*cogito parlé*)」(PP 462) のかなたに、つまり陳述され本質的真理に変えられたコギトのかなたに、確かに沈黙のコギト (*cogito tacite*) (PP 462)、私による私の経験がある。」(邦訳は中島³⁰ 665 頁、PP の原語と箇所は浜崎) と述べ、われわれの内に沈黙の領野(層)を見出す。この沈黙のコギトが身体知として、「習慣的身体 (*corps habituel*)」(PP 97) (これに対しては「現勢的身体 (*corps actuel*)」(PP 97)) の層をなしており、これが身体的な「語の所作的意味 (*signification gestuelle*)」(PP 209) となり、あるいは「世界内存在 (*être au monde*)」するわれわれの「実存的意味 (*signification existentielle*)」(PP 212) (これらに対しては「語の概念的意味 (*signification conceptuelle*)」(PP 209/212)) を為すのである。このようなメルロ＝ポンティの身体知が、ライトの非言語的知(スパナを回す、野球のバットを振る等)と重なることは明らかである。

二つ目は、「類推推論 (*analogical reasoning*)」に関してである。DA は、そ

²⁹ ‘the patron saint of the body’ (Shusterman [2005] p.151)

³⁰ この箇所以外の以下の箇所は、竹内他訳である。

の名の通り、「診断」「原因」「予後」「処方」を扱う点で³¹、「臨床判断 (clinical judgment)」と著しい類似を示している³²。臨床の現場で医者は、患者の症状を見定め、原因を探り、予後を推測し、適切な処置を施すといった判断が求められる。この種の臨床医学での判断が臨床判断と呼ばれるが、この種の判断に至る出発点となるのは、医学書に載っている病気に関する最新のリストや処方である。医者は、医学生の頃に、医学書に載っている典型的な症例と処方を学修することを通じて、似たような症状に直面したときに、適切な診断や処方を下せるよう訓練を積んできた。そして、確率的なデータも踏まえつつ、その後、場数を踏むことで、自ずとこの種の判断は鍛え上げられていくのである。これは更に言えば、その背後には類推推論や決疑論 (casuistry) が働いていることになる。だがライトの DA には類推推論の扱いが全く出てこない³³。よって、臨床判断との親和性故に、DA の枠組で類推推論がどのように扱われるのかは、われわれの今後の課題となるだろう。

最後は、「最適解導出 (inference to the most reasonable solution)」³⁴ に関してである。最適解導出とは、われわれが吉満・浜崎 [2019] で打ち出した考えである。これによると「唯一の絶対的な解のない現実社会の問題に対して、様々な状況や文脈を可能な限り考慮して、その問題に関係する学問的知 (専門的・教養的) や情報・データ・資料等を可能な限り十分揃えて、CT 等によってその問題に対する複数の最適解候補案 (多くの場合、最適解の候補 (候補案 A、候補案 B、候補案 C 等) として複数の案が出てくるだろう) の中から最も道理に適った (リーズナブルな) 最適な解をしっかりとした根拠をもつ

³¹ 診断 (何が起きたのか?) に関しては [1989] の第 3 章で、原因 (何がそれを引き起こしたのか?) に関しては [1989] の第 4 章前半で、予後 (これからどうなるのか?) と処方 (こうすることを推奨する) に関しては、[1989] の第 5 章で、それぞれ扱われている。

³² 臨床判断に関しては、Montgomery [2005] を参考にせよ。

³³ なお、注 4 で触れたプラグマ弁証論では類推推論は三つの論証 (徴候関係、類推の関係、因果関係) の内の一つとして重要視されている。

³⁴ 最適解導出については吉満・浜崎 [2019] を参照せよ。なお、この概念の当初の英訳は “deduction of the most reasonable solution” であったが、諸事情を鑑みて、この英訳に変更したい。

て導き出すことである」(吉満・浜崎 [2019] 78f 頁 (一部改変))。これはまだわれわれの探究途上のプログラムであるが、ライトの DA と軌を一にするのは明らかなだけに、DA の延長上に最適解導出型 CT は築かれることになるだろう。よって今後われわれとしては、引き続き DA を研究しつつ、これをベースにして最適解導出型 CT の内実を提示することに努めたい。

* 本稿は、JSPS 科研費 (JP19K00033) の助成を受けたものである。

参考文献

● 欧文文献

Merleau-Ponty, M. (1945) *Phénoménologie de la Perception*. Gallimard. [「PP」と略す。] [邦訳：M. メルロー＝ポンティ (1967) 『知覚の現象学 1』(みすず書房) 竹内芳郎・他訳, M. メルロー＝ポンティ (1974) 『知覚の現象学 2』(みすず書房) 竹内芳郎・他訳, M. メルロー＝ポンティ (1982) 『知覚の現象学』(法政大学出版局) 中島盛夫訳.]

Montgomery, K. (2005) *How Doctors Think*. Oxford University Press.

Rudinow, J & V. E. Barry (2008) *Invitation to Critical Thinking* (6th ed.). Thomas Wadsworth.

Ryle, G. (1949) *The Concept of Mind*. Routledge. [邦訳：G. ライル (1987) 『心の概念』(みすず書房).]

Ryle, G. (1954) *Dilemma*. Cambridge University Press. [邦訳：G. ライル (1998) 『ジレンマ』(勁草書房).]

Schoeller, D & S. Thorgeirsdottir (2019) Embodied critical thinking. *philoSOPHIA: A Journal of Continental Feminism* 9.

Shusterman, R. (2005) The silent, limping body of philosophy. In T. Carman & M. B. N. Hansen (eds.) *The Cambridge Companion to Merleau-Ponty*. Cambridge

University Press.

Van Eemeren, F. H. & A. F. Snoeck Henkemans (2017) *Argumentation* (2nd ed.).

Routledge.

Wright, L. (1976) *Teleological Explanations*. University of California Press.

Wright, L. (1982) *Better Reasoning*. Holt, Rinehart, and Winston.

Wright, L. (1989) *Practical Reasoning*. Harcourt Brace Jovanovich.

Wright, L. (1995) Argument and deliberation. *Journal of Philosophy* 92. [「95年論文」とも略す。]

Wright, L. (1999) Reasons and the deductive ideal. *Midwest Studies in Philosophy* 23. [「99年論文」とも略す。]

Wright, L. (2001) Justification, discovery, reason & argument. *Argumentation* 15. [「01年論文」とも略す。]

Wright, L. (2002) Reasoning and explaining. *Argumentation* 16. [「02年論文」とも略す。]

Wright, L. (2011) Explanation, contrast, and the primacy of practice. *European Journal of Philosophy* 22. [「11年論文」とも略す。]

Wright, L. (2012) *Critical Thinking* (2nd ed.). Oxford University Press.

Wright, L. (2013) Epilogue. In P. Huneman (ed.) *Functions: Selection and Mechanism*. Springer. [「13年論文」とも略す。]

Wright, L. (2019) Reasons. *Topoi* 38. [「19年論文」とも略す。]

● 邦文文献

米盛裕二 (2007) 『アブダクション』(勁草書房)。

吉満昭宏・浜崎盛康 (2019) 「道理性、クリティカル・シンキング及び最適解導出について」『人間科学』(琉球大学人文社会学部人間社会学科紀要) 第39号。

吉満昭宏・浜崎盛康(2020)「クリティカル・シンキングにおける発見と正当化」『人間科学』(琉球大学人文社会学部人間社会学科紀要) 第40号。

● インターネット上の資料・文献 (2020年10月10日現在での情報)

Wright, L. (2020) His Website at University of California, Riverside (<https://philosophy.ucr.edu/larry-wright>)

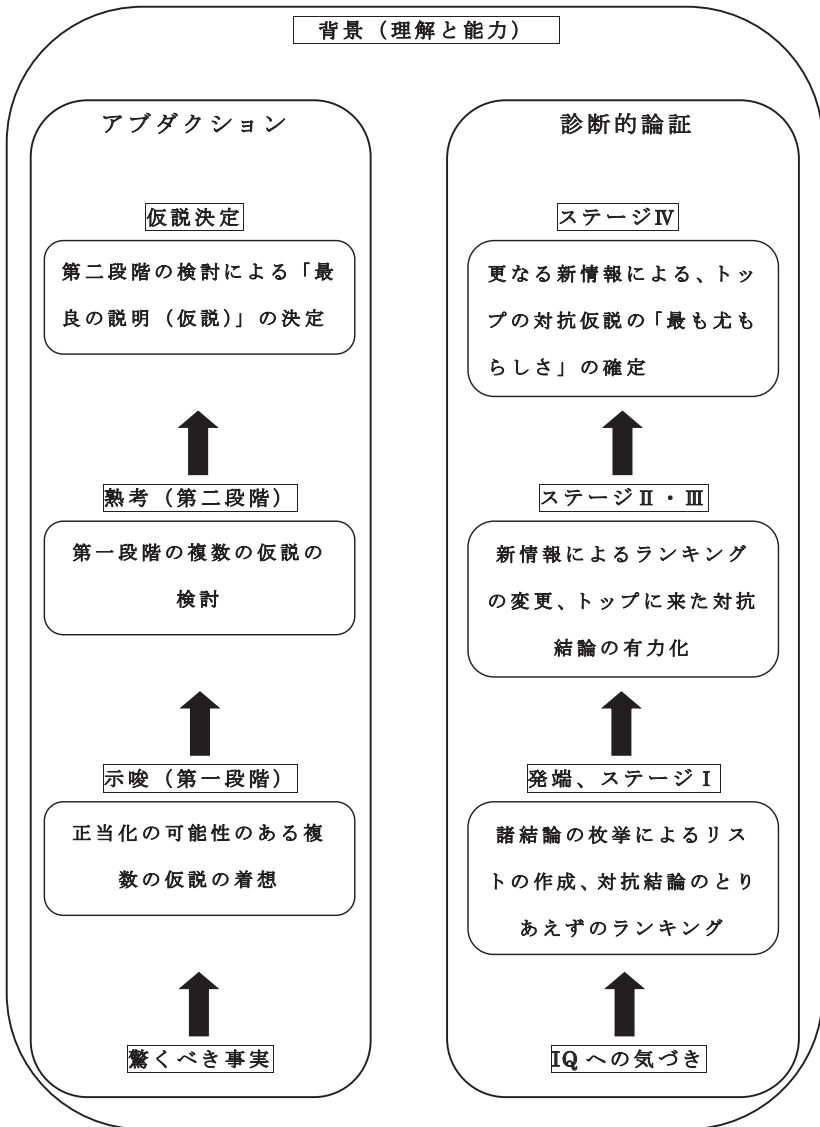


図 パースのアブダクションとライトの診断的論証の比較